

「エスノメソドロジー研究とは何か」とは何か？

国際基督教大学 岡田光弘

はじめに

『エスノメソドロジー研究』が出版されて、20 年が経った 1987 年のアメリカ社会学会において、分析的な社会学への帰還を誘う、J.アレグザンダーに対して、ガーフィンケルは、「私は同意しない」と言い放った。彼の非同意は、社会学を行なう上での根底的かつ暗黙の前提である「行為主体/社会構造」という二項対立への非同意である。エスノメソドロジー研究は、社会学が、いくつかの大きな理論上の選択を行なっているということを強調する。「行為主体/社会構造」という対立は、こうした前提のひとつなのである。

プロト EM とポスト分析的 EM

「分析的／ポスト分析的エスノメソドロジー、あるいは概念分析」[中村 2017]において、中村は EM について、「プロト EM / EM / 分析的 EM / ポスト分析的 EM」という 4 分類を示した。プロト EM とポスト分析的 EM を区別する規準についての中村解釈は、科学的合理性と日常的合理性の区別（と認知主義）によるものである。もともとの M.リンチによる区分の分岐点は、確かに「科学的合理性と日常的合理性の区別」によるが、以下に示すように、規準という点では、これは、有名な『トピック/リソース』峻別」と強力に結びついたものであるように思われる。

プロト EM 者としての Sacks

まずは、「科学的合理性と日常的合理性の区別」という点について、初期の声明の中で、Sacks は、科学としての社会学は「哲学からではなく、常識的な観点から自由にならなければならない」と提案していることを思い出そう。リンチも、(社会) 科学論としてプロト EM を論じる際には、「シュッツ(それに続くガーフィンケル、シクレル、サックス)は、カウフマンの著作に依拠している」[1993=2012:160]として、プロト EM の営みを総括する。リンチが、サックスを含めて、会話分析について非難をする時に問題視するのは、「トピック/リソース峻別」をする科学観に基づいた「分析」についてなのである。

結語

「トピック/リソースの峻別」は、社会問題の社会学で実際に行なわれたように、EM に、常識を超越する科学性を与える。リンチにとって、ポスト EM は、綱渡りによってのみ通過可能な隘路なのである。構築主義やある種の会話分析のように「トピック/リソース峻別」によって「専門的な「日常性」の区域を確立する…『穏当な(reasonable)』EM、つまり社会科学の中に快く位置づけられた研究プログラムは、古典的なひと組の区別を立てることによってのみ支持されうる」[1993=2012]プロト EM の営みなのである。

EM は、社会学と異なって、その営みを科学的なものとする基盤である「行為主体／社会構造」という構図を前提としない。それは、「EM のゼロ地点が、学問の手に触れられていない社会的世界のもつ組織された、理解可能な性格というものを肯定すること」[1993=2012 179]そのものだからである。とするなら、これとは逆に、プロト EM のもつ「トピック/リソースの峻別」といった基礎付け主義の側面を最大化しつつ、研究の基盤を社会学と共有する分析的 EM というのは、結局のところ、「行為主体／社会構造」という区分を前提とすることになり、EM にとっては語義矛盾となるはずである。そうであるなら、「積極的に位置づけた分析的エスノメソドロジーとポスト分析的 EM こそがとりわけ概念分析の社会学である」[中村 2017:122]とする中村らの主張も砂上の楼閣だということになるだろう。